Elonaを生きる！

大豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｌｏｎａを生きる！

【Ｎコード】
Ｎ８８７８Ｚ

【作者名】
大豆

【あらすじ】
アトリは石室の中で目を覚ました。見覚えのない場所、衰えている体。ヒントは一言「ヴィンデール」という言葉のみ。アトリは困惑しつつもＥｌｏｎａの世界を生き抜いていく。現在第二章・犯罪都市ダルフィ編　※Ａｒｃａｄｉａに投稿していた作品の改稿版です。Ａｒｃａｄｉａに投稿していたＥｌｏｎａの話は削除しています。

第一章１　プチの縄張り（前書き）

この話はフリーゲームであるＥｌｏｎａを元に、思いついたネタを混ぜてこねこねしたような話です。
独自に改変しているところもあるので、ゲームの設定を使わせていただいているという方が正しいです。
つまり独自解釈や独自設定が出てきます。というか出て来まくります。

中二設定が全開になりそうです。
ところどころ卑猥すぎる表現が出てきます。
色々とご注意ください。

第一章1　プチの縄張り

◆◆◆◆◆◆◆

我が主よ。

たとえ心を折られ、力を削がれようとも。

私はあなたの寵愛を受けました。

私はあなたに忠誠を捧げました。

私はあなたの忠実なる家臣。最後の下僕。

必ずや、あなたを迎えに参りましょう。

◆◆◆◆◆◆◆

「――――――――！」

体を跳ねあげるようにアトリは目を覚ました。

「……なんだ……？　…ッ！」

頭が痛む。

こめかみを押さえつつ当たりを見渡してみると、そこは石室であった。

見たこともない部屋である。

窓もない石造りの部屋。重たそうな扉の隙間から、風が吹き込んできており、小さく甲高い音が反響している。

冷たい石の床の上で彼はうつ伏せに横たわっていた。服はぼろ布を帯で括りつけた様な貧相な形（なり）である。

暗く、とても夜目が利く彼でさえ、周囲を把握するには目を凝らす必要があった。

（なんだここは……？）

また頭が痛む。

手足にもなんだか上手く力が入らない。

麻痺しているというか、酷く衰えている気がする。

ここはどこで、何故ここにいるのか分からない。

しかし何か、大事なことを忘れているような気がする。

決して忘れてはいけない何かを。

記憶を探ってみるが、『アトリ』という単語が出てくる。どうやらこれは自分の名前のようだった。
名前を思い出したことで次々と情報が浮かんでくる。だが、この場所に関する情報は無い。

ふと気付くと、手に一片の紙を握りしめていた。
乱雑に丸められたそれは酷く脆くなっており、今にも崩れ去りそうなものだった。手の中で形を保っていることが奇跡である。
アトリは息を詰め、慎重に押し広げる。

『ヴィンデール』

黒い文字で、短い文が書かれている。いや、これは血だ。黒く酸化した血の文字だ。螺子くれた文字に、執念を感じる。
アトリが読み取ると同時、役目を終えたとばかりに紙片は灰となって崩れ去った。

（ヴィンデール…）

ずきりと頭が痛んだ気がした。

アトリの記憶の中に、ヴィンデールに思い当たることは無かった。
だが、それらの単語はストンと彼の内側に落ち着いた。忘れてはいけない気がしたのだ。

（とにかく情報が必要だな）

部屋の中は歩き回れるほど広いが、めぼしい物は何もなかった。割れた壺、枯れた花、錆びて脆くなった短剣、崩れている小さな石像。なにかを祀っていたのだろうか。
短剣は儀式用に見えるが、刃は旨く使えば料理くらいになら使えるかもしれない。武器とするのは無謀な脆さだ。

（とりあえず、どうするか。外に出るにしても、体の様子が変だしな……）

アトリは自分の体が自分のものではないような錯覚を覚えていた。例えるならば、乗っていた若い馬が、いつの間にか老いたロバになっているような、極端なもどかしさを覚えていたのである。
筋肉が衰え、体がそこらの子どもと変わらない柔らかさ。

つまり、とても能力が衰えている。
自分はもっと力強い肉体をしていたはずだ。
違和感はかなりのものだった。

「……ここでじっとしていても始まらないか」

ヴィンデールとやらの情報を得るためには誰かに話を聞くか、自分で調べるか――――――――ともあれ、文化的な生活圏を訪れる必要があるだろう。
ここを出なければ話にならない。

暗いが、扉の位置はすぐ分かった。外からか細く光が差し込んで来ていたからだ。
石の扉を押しあけると、外には森林が広がっていた。この辺りは温暖な気候なのだろうか、空気が湿気ている。

背の高い木々が枝葉で太陽を遮っており、薄暗かった。

振り返れば、重い音をたてて岩の扉が閉まるところであった。彼が出てきたのは一軒家ほどもある大きな岩だ。中の部屋はくり抜いて作られたようである、

扉は巧妙に隠されており、取っ手代わりの凹みでさえ、そこに扉があると知っていなければ見逃しそうだった。

（まずは周りの探索からだ）

アトリは腰まである草をかき分けつつ、森へと足を踏み出していった。

◆◇◆◇◆

鬱蒼と茂った森は、高い木々の枝葉で太陽の光を遮りアトリの視界を制限する。

昼間だというのに、見通しは悪い。

むやみに歩き回るのはまずいだろう。現在位置や周辺の情報を取得するため、アトリは木に登って遠くを見渡すことにした。

体力の低下は深刻のようだ。
簡単に出来ると思った木登りが、苦行に思える。へとへとになりつつ天辺まで登ると、木々の隙間から遠くを見ることができる。
ここは三方が急峻な山に囲まれた場所のようで、唯一開けた先が平野となっていた。
その平野の遥か遠くに城壁のようなものが見える。城壁の内側から上がっているのは煙だろうか。
誰かが文化的な生活を営んでいるのは間違いなさそうである。目標があそこにした方がよいだろう。
当てもなく歩きだすことはしなくてよいとアトリは喜び、するすると木を降りた。

彼がモンスターに出会ったのは歩き出して5歩もいかないところであった。

「プ」

白い餅のようなモンスターである。体長は４０?ほどだろうか。体重も軽そうだ。
プチという、好戦的なくせに弱く、子供でも倒せる生物だ。
だが、実力差があればそれを理解してちょっかいを出しては来ないだろう。
気にすることも無いと歩く彼に、プチは問答無用でぶつかってきた。

プチは、彼我の実力差を正しく理解していた。つまり、アトリがとても貧弱だということを見抜いていたのである。

「おふっ！」

突然の攻撃に焦るアトリ。プチの動きは相当遅いが、アトリの反応もまた遅かった。身を捩って鳩尾で受けることは回避するが、横腹にしっかりと体当たりを受けてしまう。
直後、攻撃された部位がとても痛みだした。

（い、痛いだと…！？）

腹部への体当たりが、軽く内臓が出そうになる威力である。敵意満々のプチがいなければ蹲って胃液を吐きだしたいところだ。

とてもプチの攻撃だとは思えない。自分の衰えは相当なものだと、ようやくアトリは認識した。

だが、雑魚と思っていた相手に良いようにやられていい気がする筈もない。アトリのプライドに火がついた。

（……この野郎！）

魔法を唱えて爆散させてやろうとしたが度忘れしたのか思い出せず、そもそも体内のマナが足りなかった。

ならばアトリは拳を握り、構えをとる。一瞬どんなふうに構えようか考えてしまったところに、衰えの深刻さが感じ取れる。
本調子なら、ここまでで２００回はプチをミンチにしているところだ。

脚を前後にして半身になり、膝を軽く曲げ、両手を体の正中線を隠すように構える。少しぎこちないながらも、わりと様になっている構えであった。というか構えすらも良く思い出せないとはどういうことだと叫びたい。

プチは構うことなく突っ込んできた。

「ぉお！」

筋肉が衰えれば感覚も変わる。
以前の感覚で放たれたアトリの拳は、とてもちぐはぐな動きで、体重の重さを２０分の一くらい拳へと伝え、しょっぱい威力となった。

跳びかかってくるプチに対し、カウンター気味に打ちおろしの拳を放つ。
各関節を稼働させるタイミングがずれて上手く力が抜けていない遅いパンチだったが、プチを迎撃することには成功した。

叩き落とされるプチ。

踏みつければずっとかなりの優位に立てただろうが、しかしアトリに追撃に移る余裕は無かった。拳が無性に痛かったのだ。
プチは意外と堅い。成熟した西瓜ほどの堅さであり、鈍って柔らかくなったアトリの拳骨が悲鳴を上げていた。

「く……何故これほどまで……！」

木の板も割れないような軟弱な拳になっていることに呻く。
攻撃した方が怯むという珍事を、プチは見逃さなかった。

衝撃から立ち直ったプチが地面から跳び上がり、アトリの顎をかちあげる。

アトリの視界が一瞬白くなり、慌てて意識を手繰り寄せる。

「…っ！」

手を振って空中のプチを弾き飛ばす。

弾かれたプチは無様ながらもしっかりと地面に着地する。大したダメージを受けた風ではなかった。

アトリは戦慄した。

（つ……強い……！　というか俺が弱い……！）

まさにその通りである。

しかし、こんなところで命を散らす訳にはいかない。彼は気合を入れ、プチへと襲いかかった。

＊ぷちゅ＊

そんな音を立て、プチは死んだ。
柔らかい拳で殴って倒せるのだから決して耐久力は高くなかったのだろう。
白い体から魂的なものが抜けていき、プチの体は動かなくなった。
荒い息を整えつつ、アトリは拳を下ろす。

プチの攻撃は遅く、何度も避けることができた。
しかしアトリの攻撃も遅く、何度も避けられた。
一進一退の攻防で、同じ数だけ攻撃も当たっていたので、勝つことができたのは耐久力の差だろう。
アトリも限界が近い。

酷く疲れた。
体がとても痛い。
今にも倒れそう。
拳もすごく痛い。
このまま先へ進むのは、無謀を通り越して自殺志願だ。

情けなさに苦しみつつ、アトリは痛む体を引きずって、大岩の中へと逃げ帰った。
無論これ以上の戦いを避けるためである。
扉を閉める際、草むらにプチの姿がチラホラ見えた。進むどころか、しばらくは外に出れないことが決定した。

３時間ほど死体のように突っ伏して、その後腹が空いたので石のように堅いパンを食べつつ、アトリはこれからのことを考えていた。先ほどは、プチが一体だからこそ勝てたが、徒党を組まれたら即座に死ねる。

（何とか隠れながら行くしかないか……）

プチごときにとても悔しいが、逃げ回るしか手は無いだろう。
体の痛みは治まってきている。
拳を振ってみたが、動きに支障はなさそうだ。回復速度は、以前と比べても悪くない。

体の動きを確かめた後、そろり、と扉を開けてみる。

「プ」
「プ」
「プ」
「プ」
「ププ」
「プ」
「ピィ！」

（なんだと……）

いっぱいいた。

２０センチほどしか開けていないのに、視界の中に１０匹はプチがいた。遠くの方には赤い、明らかに強そうな個体もいた。ベスプチ

というプチの亜種だ。記憶は雑魚だと断じるが、アトリの目で見たところ、奇跡でも起きないと勝てる気がしない。
つまり、以前の基準からすれば、今のアトリは雑魚以下なのだった。
外の光景から考えるに、逃げるとか立ち向かうとか、そういう選択肢は現実的ではない。
出た瞬間なぶり殺しにされる。
慌てて扉を閉めるが、その一瞬前に、扉の内側へ飛び込んでくる影があった。
「プ！」
「！？」
プチである。
柔軟な体を変形させて、するりと滑り込んできた。
「く、唯一の安全な場所が……！」
侵入を許してしまったことを悔みつつ、さっさと扉を閉め切る。
「いや、待て」
ぽよんぽよんと跳ねて臨戦態勢に入るプチを苦々しく見るうちにアトリは気付いた。
（これはチャンスじゃないか？）
プチが一体ならアトリは勝利できる。
そして外にはたくさんのプチがいる。

ならば、それらを一匹ずつ倒して行けばいいのだ。
こちらも傷を負うだろうが、休み休み行けばいい。
倒しているうちに、効果的な倒し方なども分かってくるだろう。

「プ！」
「よし、こい！」

アトリは跳びかかってきたプチに、再度拳を拳を握りしめた。

プチを殴り飛ばす。
一心不乱に拳を振るう。時々蹴ってみる。
殺した後は、少し扉を開けて新たなプチを呼び込む。
気付けば石室の中はプチの吐いた血の匂いでいっぱいだった。霧が出来る程の血液臭に、アトリの鼻は慣れ切ってしまっていた。

プチの死骸や飛び出た目玉を端の方に寄せ、次々と獲物を引っ張り込む。
アトリの攻撃の命中率は相変わらず低いし、当たっても大して効いているようには見えないが、それは相手も同じである。

何匹か倒すうちにプチの耐久力が分かってきた。
しっかりと力を込めた拳で、１０発。クリーンヒットすればもっと少なくても倒せる。

敵の攻撃は体当たりだけなので、かわしざまに殴っていれば倒せるようだ。

「……良い感じだ」

自分のへぼさに嘆くことはもう止めた。今あるカードで勝負するしかないのだ。
体当たりしかしてこない為に、一対一なら幾分か余裕も出てきた。
相変わらず拳が痛いが、二連戦もこなせる。

戦いの感覚は衰え過ぎていて一から作り上げる必要があるだろうが、以前の感覚を頼りに練り上げることもできるだろう。
何か新たな、拳を使うコツのようなものを得たところで、今日は寝ることにした。
体が酷く疲労しており、睡眠を求めている。
そして腹も減っている。

アトリは堅くてまずいパンを食べようとしたところで、落ちているプチの死骸を見て思った。

（これを食べればいいか）

死んだプチの体はとても柔らかそうだ。プチの肉には美容の効果があり、味も悪くない。

プチの死体を手に持ってから、脆そうな短剣を突き立てる。
慎重に使えばすぐダメになることもないだろうと、プチの身を切り取っていく。
プチの皮は決して柔らかくないのだが、刃はするりと切り裂き、瞬く間にプチを解体することができた。

意外に使える短剣のようだ。

プチにも内臓や脳髄がある。
そうでなければ殴っところで大してダメージが入らないのだが、見れば見るほど不思議な生物だ。
生き物の内臓はかなり臭うはずだが、アトリの鼻の感覚は死んでいるので何も感じない。

死んだプチの肉はとても柔らかい。ナイフの刃がするりと潜り込む。
切り取った肉を食べて見ると、歯触りがよく、生だというのに肉の旨みが感じられる。噛んでいると、舌の上ですっと溶けてしまった。

「……うまいな」

記憶と違い、かなりの美味だ。空腹は最高の調味料とはよく言ったものだ。
そして、肉を食べることで何かエネルギーのようなものを得た感触があった。これが美容の効果だ。プチの肉にはとても即効性があり、しかも高い効果を持つ。
具体的には、肌が活性化してつるつるの美肌になりそうな感触だ。

美しくなるのは悪くない。
魅力は様々な場面で重要な要素となるからだ。見た目の悪い者は交渉のテーブルに着くことすらできない。

とりあえずプチ一匹では足りなかったのでもう一匹捌いて見る。
幸い十数匹は殺している。
アトリはお腹が満たされるまで、プチの美味しい肉を食べていく。
殴り殺したことが有利に働いており、プチの肉体はほぼ完全なままで残っているものが多い。結構な量になった。

アトリは自分の容姿が劇的に変化していくのを感じる。
ガサガサであった肌が、するりとした艶を獲得し、髪の毛までサラサラになったようだった。

（結局全部食べてしまったな）

無理して詰め込んだ腹を撫でながら、アトリは横になって眠りにつくのだった。

◆◇◆◇◆

アトリは目を覚ました。堅い床のせいだろうか、何度か目が覚めた記憶があるが、とりあえずはリフレッシュできたようだ。

しかし気疲れがあまり取れていない。アトリは夢の中でさえプチと闘っていたのだ。しかもとても苦戦していた。ノイローゼになりそうだ。

しかしそのお陰で、身のかわし方に一つアイディアが浮かんだ。

フェイントを入れてみるという至極簡単なものだ。何故今まで思い

つきもしなかったのか。思考的な衰えも半端ではないようだ。

唸るアトリの体は僅かに体が火照っており、昨日受けた傷がまるっきり消えていた。回復力はやはり素晴らしい。逆に言えば、褒められるのはそこだけだ。

早く昔の勘を取り戻さないと色々と不味い。

昨日無理して詰め込んだせいか、腹は全く減っていない。

だが水が欲しい。プチの血液は薄いので飲めば僅かに喉が潤うが、焼け石に水のような気もする。

体の様子から我慢できるのは二日程度だ。

「……今日もやるとしようか」

いっそ居なくなってくれていればよかったのだが、そっと開けた扉の向こうには、昨日から全く減ったように見えないプチの群れがいる。

少し心が折れそうになりつつも、プチを一匹誘い入れ、アトリは戦い始めるのだった。

第一章2

人間は話す必要がないと、どんどん言葉を捨てていく。
命の危険と隣り合わせ状況で、しかも孤独。
扉の外には全然減らないプチの大群。
ずっと同じ肉を食い、水不足から思考も朦朧としてくる。

そして、ついにアトリの精神は弾けた。

「ハハッ……ハハハハハハハ！」

衝動のまま、手に持っていた短剣を床に叩きつける。ガラスが割れるような音と共に、折れた刃が床を跳ね返り頬を掠めて行く。
血が一筋垂れるのを感じつつ、アトリは扉を開け放って駆け出した。
アトリ・バーサクモードである。

「ヒィ――――ハハァッ！」

扉の外にはプチが２０数匹。やや離れて赤いプチ。
アトリは狂乱のままに赤いプチへと殴りかかった。

この時点でアトリはベスプチを殴り殺せるほどの強さを手に入れていた。
だが、周りには白いプチが大量にいる。
数の暴力の前に、アトリは無力であった。

――――アトリはベスプチを殴りつけた！　ベスプチは痛手を負った！

――――ベスプチの体当たりをかわした！

――――プチの体当たりをくらった！
――――プチの体当たりをくらった！
――――プチの体当たりをくらった！

――――アトリは怯んでいる！

――――プチの体当たりをくらった！――――プチの体当たりをくらった！――――プチの体当たりをくらった！――――プチの体当たりをくらった！――――プチの体当たりをくらった！　アトリは痛手を負った！

――――ベスプチの体当たりをくらった！　アトリは致命傷を受けた！

――――プチの体当たりをくらった！　アトリはミンチになった！

アトリは死んだ。さようなら……。

「――――――ッ！？」

アトリは目を覚ました。
死骸の腐敗が始まって悪臭立ち込める石室の中である。

「夢か……」

また生々し過ぎる夢だった。死ぬほど体当たりを食らったので、どのように体当たりを受ければダメージを減らせるか思い出してしまったほどだ。

短剣を確認するが、大丈夫だった。折れていない。間違いなく夢だ。

安堵のため息を吐きつつも、夢のように発狂するのはそう遠くない、とアトリは思った。

心が酷く疲れているのだ。
そのひとつの原因として、扉の前で全くらないプチの数がある。先が見えないというのはかなりきつい。
ここにこもって二度目の朝。
そろそろ水に対する飢えが酷い。だが、外のプチどもが退く様子も無い。

（こうなったら……一か八か、強行突破しかないか）

昨日の手ごたえから、ベスプチくらいならいけるようになった気がする。恐らく大丈夫だ。
アトリは口を引き結ぶと、扉に手を懸ける。

「――――ッ！」

石でできている扉は意外と重い。非力なアトリには特に。
素早く開閉するためにはそれなりに力を込める必要がある。
アトリは扉を蹴って開き、勢いのまま、一気に駆け出した。

目に入るのはざっと３０を超すであろうプチの群れだった。
その上、ちらほらとベスプチが混ざっている。

跳びかかってきたプチを踏みつけながら素早く見渡し、包囲が薄そうな所に向かって走り出す。

前から左右から、次々にプチがぶつかってくる。
それを叩き落とし、蹴り飛ばし、身を捩ってかわしながら、アトリは走る。
幸いなことに、移動速度はこちらの方がやや上のようだ。
走るのをやめなければ、後ろからくるプチは無視して良いだろう。

（よし……いける！）

そう思ったのも束の間、アトリは血の気の引くような感覚を走る方向から感じ取る。

見れば、目と鼻の先の、そこにいるのはアトリよりやや背が低い、人型のモンスターだった。

手にボロボロの長剣を持った、白い毛を持つ犬の顔の異形である。

コボルトだ。初心者冒険者が最初にぶち当たる壁ともいわれる。

「■■■■■■■■■――――――！」

毛を逆立たせ、コボルトは禍々しい声で咆哮する。

アトリは見た瞬間絶望した。

（これは……死んだか…）

何故なら、絶対に勝てない相手だと悟ってしまったから。

彼我の実力差を考えるのも馬鹿らしい。

「――――――――などと諦められるはずがあるかっ！」

アトリは走る速度を緩めず、短剣を投げる。

至近距離からの投擲だ。当たればよし。払うにしても、払っている隙に横を走り抜けるつもりであった。コボルトは胴長短足で、走る速度ならいい勝負ができるかもしれなかったからだ。

しかしコボルトは体勢を崩すことも無く簡単に避けた。反応速度がそもそもアトリと違ったのだ。

コボルトが、手に持った長剣を横振りに叩きつけてきた。

（――――ぐぅう！）

アトリの脇腹に錆びの浮いた鉄の塊がめり込む。救いは、鉄の剣に切れ味が皆無であったことだ。それでも、アトリのあばら骨はまとめて数本折られ、アトリは盛大に吹き飛ばされた。
アトリは地面を転がり、樹の幹にぶつかって止まる。

揺れた樹からはらはらと葉っぱが落ちてくる中、コボルトが走り寄ってくる。見たところ脚は速くない。
立ち上がれば逃げられるかもしれない。だが、アトリの体は機能を停止したように動かない。

――――――ちくしょう。

「すまない……」

誰へ向けてかは分からないが、自然と謝罪が口を突いて出た。

誰かを、
待っていてくれる誰かを、
助けに行かねばならなかったのに。

「■■■■■■■■■■■■■――――――！」

コボルトが長剣を振り上げ迫ってくる。

アトリはツイていなかった。
訳も分からず放り出された土地が、モンスターの巣窟であり、体は底辺まで衰えているというのに武器は無く、何とか状況を脱したと思ったら、盤ごとひっくり返すような存在が出てきた。

だから、これはその不運を埋めるための、救済だったのかもしれない。
もしくは――――――女神の気まぐれ。

「――――――――Ｍｒ．Ｂｕｂｂｌｅｓ！　天使よ！　天使がいるわ！」

『ォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

幼い女性の声。くぐもった唸り声。

金属がこすれる音が響き、アトリの倒れ伏す側を、残像を残して巨大な何かが通り過ぎる。
木々をなぎ倒し、地面を削り、――――――そしてアトリに死を運ぼうとしていたコボルトを、その右手に装着されたドリルで地面に

串刺しにしていた。コボルトの持っていた長剣が、ドリルに触れて折れ飛んだ。

ドリルを持つのは、異形の存在であった。
ガラス窓のついた厳つい潜水服のような、もしくは重厚な全身鎧のようなものを身につけた大きな影。
顔の位置にあるガラス窓の奥から、淡い光が出ており、薄暗い森を仄かに照らしている。
潜水服に乗り移った悪鬼のようさえに見える。

ビッグダディ。冒険者の間では有名な存在だった。敵対すべきではない謎の存在として。
辺りのプチたちが、その威容に慄き、我先にと逃げ出していく。

「■゛■゛■゛■゛■゛■゛■゛――――――ッ！」

その大きな影の下で、コボルトが回転するドリルで削られ、ミンチになっていく。
断末魔の声を聞きながら呆然としていると、倒れているアトリの横に、ボロボロの黒いドレスを纏った女の子が近寄ってくる。さっき叫んでいた女の子だ。
眼球が白内障のように白く濁っており、見えているのかいないのか、フラフラとおぼつかない足取りで歩いてくる。

リトルシスター。この少女もまた有名だ。彼女は巨大な注射器で死体から血液を吸い取り摂取して、体内の細胞で生物を進化させる薬物を生成するという。その効果は非常に有用であるため、少女の肉は同量の金より価値がある。

「～♪」

リトルシスターは何か小さな声で歌っているようだ。
うつ伏せになっているアトリの視界を、彼女の白い裸足が埋め尽くした。

「――――お」

何か言おうとしたアトリの声は一言で途切れた。

ドスリ、と。

アトリの背中に注射器が刺さったのだ。
少女が両手で、突き立てた。
明らかに刺さってはいけない位置である。
心臓の位置。

アトリは絶叫する。

少女は、ふと、瞬きした。

「……天使じゃないわ」

つまらなそうに鼻を鳴らして、無造作に注射器を抜き取った。
アトリの血液が穴を逆流して噴き上がる。ミズオは急速に自分が死んで行くのを感じる。むしろ即死していないのが奇跡だ。

（ぁぁあ……っ！）
「Ｍｒ．Ｂｕｂｂｌｅｓｌ！」

目の前で少女が踵を返そうとする。地面に横たわるアトリの目には、

去ろうとする白く柔らかい少女の踵が見える。
何も変哲のなさそうな足。しかし、その肉には、血には、進化の薬が充満している。

（死ぬくらいなら…！）

アトリの手が執念で動いた。
リトルシスターの脚を掴み引き寄せ、そしてアトリは噛みついた。

リトルシスターが絶叫した。

柔らかい踵に、ぶつりと歯が食い込んだ。口の中に溢れ出る血液。
ドロドロと舌を流れ、喉の奥へと落ちていく。他人の血など初めて舐める。
想像以上に不快で、おぞましい味。

次の瞬間、燃え上がるような衝撃が、アトリの体を駆け巡った。
次に神経が千切れるような痛み。
細胞から、骨子から、存在ごと造り変えられていくようだ。

激痛。

胸の傷が、燃え上がりそうだ。

「いやぁ！　いやぁあああああ！　あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ！」

リトルシスターは半狂乱し、足をふりほどいて走り去る。
ビッグダディは逡巡したようだが、不埒物を殺すことよりも、リトルシスターを保護することを優先したようだった。
巨体が、少女を追って森の奥へと消えていく。

そこまで見届け、アトリの意識は落ちて行った。

◆◆◆◆◆◆◆

『ありがとう。いや、おめでとう。ずっと、君を待っていた』
「待たせてすまない」
『これからはずっと一緒だね』
「そうだな。誰にも、邪魔はさせない」

懐かしい声が聞こえる。かつての、あの頃の、あの言葉。
彼女のそばにいるために、誰にも勝る強さを手に入れた。
彼女のためなら、血反吐を吐くのも辛くなかった。

思い出に触れるだけで、心が震える。

◆◆◆◆◆◆◆

アトリはゆっくりと目を開いた。生きている。

どうやら、賭けに勝ったようだ。

皮膚がやや緑色っぽくなっているのがその証だろう。皮膚の下を流れる血が変質したのだ。

リトルシスターの血肉は、服用した者に多様なバリエーションの変化を与える。

それを総じて、進化と呼んでいるのだが、現れる形質は、関節の構造が変わったり、猫目になったり、皮膚が硬化したりと様々だ。その中に、新陳代謝を高めるなどして、回復力が増すという変化もあるのだ。

もとより回復に関しては秀でていた肉体だ。相乗して、致命傷すら修復したのだとアトリは結論付けた。

気絶していたのはどれくらいだろうか、瀕死であったはずの体が、今は全く支障なく動く。

周りを見渡せば、先ほどの少女と潜水服の異形は既に居なくなっており、代わりに、逃げ出していたはずのプチたちが戻ってきていた。

拳を握る。腕の筋肉が収縮し、骨が軋む。掌を爪が突き破ったが、瞬く間に回復する。

少女の血を啜ったことで、血の色だけではなく筋肉にも変化が起こったようだ。

アトリの体には、今までにない大きな力が漲っていた。

もはや、プチに脅威を感じようはずがない。

……先を急ごう。

アトリはゆっくりと歩きだす。

プチたちは最早敵ではなかった。体当たりをしてくる彼らに拳を振るう。

上手く当たれば一撃で、当たり損ねでも2発も叩けば、彼らは物言わぬ肉塊に変わった。

ベスプチでさえ、殆ど無傷で倒すことができた。

破裂する風船のようにプチが弾け飛ぶ。

（まだ足りない……）

記憶は肝心なところが戻っていない、とアトリは感じた。

だが、このままでは絶対的に力が不足していることは確信できた。

ヴィンデールが何なのかは知らないが、以前の、決して弱くなかった自分が今のような状態になる何かが起こったということなのだ。

力を戻して、いや以前より強くする必要がある、とアトリは判断する。

今回のような幸運はもう起こらないと思った方がいい。瀕死であったからこそ、リトルシスターは護衛を置いて無防備に近づいてきたのだ。
これからは、ヴィんで＾ルが何かを探ると並行して、己を練り上げていかなければ行かないだろう。

そうして、アトリはプチの巣窟の最奥から、森の外へ向けて歩き出した。

彼が向かう町の名は、ダルフィ。
犯罪者が大手を振って生活する、犯罪都市である。

第一章２（後書き）

とりあえず第一章というかプロローグ？はここまで。
読んでいただき、ありがとうございました。

コボルトは初期に遭遇すると驚くほど強く感じるモンスターです。
防具を整えていないとペットが一撃でミンチになってとても悲しくなります。

今回出てきたビッグダディは腕にドリルがついているＢＩＯＳＨＯＣＫの方のビッグダディです。ショットガンは持ってません。

今回少女の血をすすりましたが、Ｅｌｏｎａはカニバル的な描写が良く出てくるので、無理だなぁと思った方はここらで止めておいた方がいいと思います。
そんなエグイようには書かないつもりですけど。

第二章１　犯罪都市ダルフィ

第二章１

ダルフィは高い城壁で覆われた中心街を持つが、その周囲に数倍の面積の貧民街が形成されている。
力を権力にまで昇華させた人々が住む中心街に近寄ろうと思わなければ、誰でも住みつくことができる場所であった。

ただし、そこには法がない。
種族を問わず、犯罪者すらも受け入れてしまう街である。
お陰で身元不明のアトリも住み着くことができていた。ただ、溶け込めているとは言い難い。

ダルフィの貧民街には、今日も危険な空気が漂っている。
露店の並ぶ道端には体を売る者たちが堂々と立ち並び、道行く人々を品定めしながら、艶っぽい視線を送っている。
どこか遠くで悲鳴が上がり、それがすぐに喧騒にまぎれて聞こえなくなる。
客引きの声、怒声、息を潜めた不穏な会話。路地の陰から人々の財布を狙う、スリの瞳。

強い武具を自慢していた男が次の日には居なくなり、その次の日には武具屋の軒先に彼の武具が並んでいる。
路地裏に捨てられた死体は、群がった乞食が骨まで食べて、痕跡すら残らない。

それらが日常と化しているこの街では、何が起きても不思議ではない雰囲気があった。

◆◇◆◇◆

プチの巣窟を抜け出したアトリが、ダルフィへと辿り着く前に、彼に幸運が訪れていた。
歩いていると、冒険者の亡骸を見つけたのだ。

疎らになってきている木々の隙間から差し込む光に浮き上がるように、その亡骸は捨て置かれていた。
死体は死んでから相当な時間が経っているようで、見事に白骨化している。獣に食い荒らされたのだろう。骨は配置がバラバラで、脚は片方が行方不明だ。噛み千切られて持っていかれたのだろう。
ぽっかりとした眼窩から樹の芽が生えてきており、なんとも無常を感じさせた。

死体は白銀の鎧を身につけ、手には革の手袋を付けていた。恐らく荒事を生業とする人物だったのだろう。武器は無いのは、持ち去られたか、壊れたか。
服や靴も身に着けていたが、それらは月日の影響でボロボロになっており、とても使えそうにない。
鎧も傷だらけで胸から腹にかけて大きな穴が開いており背中側に貫通していた。
どう見ても使い物になりそうにない。
だが使える物も確かにある。
例えば手袋は、とても状態がいい。ちょうど欲しかった物である。
殴るたびに手が痛むのには、辟易していたのだ。

（運が良いな）

手際良く、死体から装備を剥ぎ取っていく。
このような非人道的な行為は、やり過ぎると顔に出る。卑しく、暗い光が眼に宿るのだ。
物を売る人々は、その光に敏感だ。死人を辱める行為は程々にしておく必要がある。
だが、今回限りにするならばそれほど問題ないだろう。

手袋を嵌めつつ、さらに持ち物もあさる。
ロドニーという名前の書かれたタグが白骨化した首にかかっていた。
どうやらこの行き
倒れは男だったらしい。所属はダルフィという街のギルド。

腰に付いていた袋には、硬貨の詰まった財布と、濁って藻のようなものが浮かんでいる瓶（恐らく中身は腐っている）がある。
元が何か分からない黒い塊もあった。恐らく食べ物が腐ったものだと見当をつける。
そして財布の中には、合計で２００，０００ｇｐほどが仕舞われていた。気軽に持ち歩く金額ではない。
この死体、実は名の知れた人間だったのかもしれない。

大方探り終えると、乾燥しきっていた白骨は崩れて灰になっていた。
風に乗ってサラサラと吹き散らされて行く。
刹那的な生活を営む冒険者の末路は、いつも無情だ。
気を抜けばあっという間にアトリもこうなるだろう。

ダルフィへの道すがら、野生化した鶏やウサギ、大きなムカデなどが襲いかかってくる。殴りつけるとほとんどを一撃で倒すことができた。
片方の手袋は２００ｇほどで何もしなければ重さはほとんど感じないが、拳は確実に重くなる。
拳骨も守られるし、とてもよい感じだった。
豊かな森には、その恩恵にあずかる様々なモンスターが徘徊してい

る。
体長１２０?もある、堅い甲殻を背負ったヤドカリや、音もなく這いまわる大きな蜘蛛、木の影にまぎれて飛翔する大きなコウモリ。独自の生態系を築く彼らは、異分子であるアトリに問答無用で襲いかかってくる。
だがそれらは総じてそれほど強くない。堅い殻に引っ込んでどうしようもなかったヤドカリを除けば、問題なく対処できる。
先のコボルトに出会わない限り、そうそう後れをとりそうになかった。

歩いて行くと記憶が刺激され、様々なことを思い出す。森の歩き方、有害な植物の見分け方、食べられる果実のある場所、水の湧く場所。しばらく歩けば、その足取りは熟練者のそれと近い物となっていた。だが感覚が鈍くなっているのか、気配の察知が上手く出来ない。
進むアトリの足取りは、自然と慎重になった。

アトリは緑の苔が生える岩々の隙間から流れ出る水を汲み、瑞々しい果実を口にしながら、森を抜け、街へとたどり着いたのだった。

ダルフィの貧民街は広かった。ざっと歩いて、一周するのに2日はかかる。
住民などがどれほどいるかも不明で、統治しようとする機関など存

在しないため未だに貧民街は膨らみ続けているという。
これほど大きな都市だというのに、アトリの記憶にはないようで、もしかしたらアトリは、以前いた場所とは違う大陸に来てしまったのかもしれないと考え、気づけば足が止まっていた。
懐へ手を差し込む馬鹿がいなければ、しばらくぼーっとしていたままだったかもしれない。
技術のなっていないスリを殴りつけたあと放置して歩いていると、混沌とした町並みの中で一際目立つ、大きな建物があった。

冒険者ギルドの支部であった。
本部はダルフィ中心街の方にあるらしい。

ギルドはダルフィの唯一の公的機関であるようだった。信頼が裏切りとセットで扱われるこの街では信じられないほど、信頼性が高いと感じた。
この街ではギルドにだけは嘘を吐くことができないというのがその理由だ。
禁止されているのではなく、拷問などがためらいなく行われ、また騙し通せても後に嘘を吐いたと分かった時の報復が苛烈なために、嘘を吐こうと思わないのである。
ヴィンデールの情報を得るならこのギルドにした方がよさそうだ、とアトリは感じる。依頼を出すことも考えた方がいいだろう。

住民たちは自分の力で達成困難なことをギルドに依頼し、冒険者たちはギルドを通して依頼を受ける。
ギルドを介さない、依頼を張りだす掲示板などもあるが、情報を吟味する必要があり、あまり使用されていないのが現状だ。
その他、ギルドは各街ごとに特色がある。訓練施設が充実していたり、魔法に関する資料が豊富だったり。ダルフィのギルドではギルドに認められると盗品を売り捌くことが可能となる。

よって盗賊ギルドとの蔑称をいただいているである。

アトリの目的地はこの盗賊ギルドだった。
ヴィンデールの情報を得たいのはもちろんだが、なにより死亡していた冒険者、ロドニーのタグを届けるためである。
この街ではどうだか知らないが、アトリのいた場所では死した冒険者のタグを届け出ることは、冒険者の義務だったからだ。

アトリが軋む扉を開けると、中は騒然としていた。
建物のつくりは酒場風で、カウンターといくつかのテーブルが置いてある。カウンターにはぞんざいな字で「依頼受付」と書かれた布がかけてある。
壁には大きな掲示板があり、多くの紙がピンで止めてあった。
実際に酒場としても機能しているおり、テーブルでは屈強な面構えの男たちがジョッキを手に歓談している。

そして、カウンターの奥でバーテンらしき強面の人物がウエイトレスらしき服装の女性相手に腰を振っていた。

「ああ――――ッ！　す、すごい！　死んじゃう！」
「く、いいもんもってんじゃねぇか！　おらッ！」
「あ、あ、あッ！」

肉がぶつかり合う生々しい音が喧噪のなかでも一際異質である。
獣のように絡み合う二人に、テーブルから声が飛ぶ。

「おいバーテン、クリムエールもう一杯よこせ」

「馬鹿野郎！　俺は今取り込み中だろうが！　ふん、はッ！　見て分かれ！」
「はぁッ！　ハァん！　死んじゃう！　死んじゃうッ！」
「ふざけんな！　客商売する気あんのか！」
「全くねぇよ！　黙っとけ！」
「ちょ、ちょっと休ませてぇ！」
（な、何が起こっているんだ……！？）
何故バーテン（？）は盛っていているのか。
何故誰も反応しないのか。
（もしや普通のことなのか……？）
アトリが入口で唖然としていると、横から声がかかる。
「何の用だ。冷やかしか？」
黒光りする全身鎧を着込んだ精悍な男が、アトリを見ていた。ギルドの番兵のようだ。
「いや、ギルドの職員に用事があったのだが……」
「お、そうか」
男は片眉を上げると、女と絡み合っている男に向けて叫んだ。
「おいゴルオス！　客だぞ！」

（なんだと！？）

あの汚い尻を晒して性交中の男が、ギルドの職員。アトリの知識では、ギルドの職員と言えば、倍率の高い試験を勝ちぬけたエリートだけがなることのできる上等な職業の筈なのだが、ここでは違うというのだろうか。カルチャーショックが隠せない。

ゴルオスからすぐに、声が返ってくる。

「もう少し待たせとけっ！　今いいところなんだッ！」

「死んじゃう！　だめ！　もうだめ！」

番兵が、肩を竦める。

「まぁ見たとおりだ。わりぃな坊主。急ぎの用か？」

「いや……ここのギルドメンバーの死体を見つけてな。タグを届けに来ただけだ」

と言って、ロドニー、と書かれたタグを見せる。

「ん？　おお、ロドニーのかよ。最近見ねぇと思ったら死んでたとはねぇ」

番兵は少し寂しそうに目を細める。

「知り合いだったのか？」

「まぁな」

「そうか。迷惑をかけるが、これを職員に渡しておいてくれ」

「……他に用事は無かったのか？」

「忙しそうだからまた出直すとするよ」

ヴィンデールについて今はとても聞けそうにない。今日はもう遅いし、宿を取りに行こうとアトリは思った。
タグを渡して外に出ようとすると、番兵に呼び止められる。

「ああ、いや待て待て。お前、他の街から来たばっかりだろ？」
「…？　ああ、今日来たばかりだが」

だろうと思ったぜ、と番兵は呟く。

「他の街だと違うらしいが、この街ではタグなんて届けても意味ねぇんだ。それどころか、死んだ奴の残した武器やなんかをギルドに取られちまうぜ。その手袋とかな。だから、このタグは砕いて捨てるのが普通だ」
「……あんたはギルド側の人間じゃないのか？」
「は、そこまで義理はねぇよ。ロドニーのもんをくれてやるのも癪だしな。ところで坊主。お前今日来たばっかりだって言ってたな。いい宿があるぜ」
「いい宿？」

番兵は皮肉げに口を吊り上げる。

「まぁ宿って言うか、ちょうど今家主が失踪したばっかりの空き物件があることを俺は知ったんだが……この情報、金貨５枚で買わねぇか？」

金貨一枚で１，０００ｇｐ。５枚だと、結構な大金だ。

「……商売上手だな」
「ハッ、その様子なら払えるみたいじゃねぇか」

アトリはため息を吐きつつ言った。

「まけてくれないか？」

門兵の答えはＮＯだった。

第二章１　犯罪都市ダルフィ（後書き）

ダルフィ名物、用事があるのに店主がお取り込み中だったの巻。
実は気持ちいいことって肩揉みのことかもしれないけれど、このＳＳでは本番行為です。

第二章2

番兵が（有料で）教えてくれたロドニーの住処に向かう途中のこと。番兵お手製の地図を見て歩きながら、ギルドで見た職員兼バーテンのゴルデスのご乱心は、実はまだマシなものだったのではないだろうか、とアトリは思い始めていた。

夕暮れ時のダルフィは、まるで街一つが乱交場にでも成り果てたような有様だったからだ。

「あ～ら、お兄さん、いい体してるじゃない。一晩夢を見させてあげてもいいのよ？　お兄さんなら４００ｇｐでいいわ」
「フハーン！　良し買った！　すぐやるぞ！　ここで脱げ！」
「あ、もう……焦っちゃダ～メ……一晩かけてゆっくりしましょ？　うふふ」
「ヒャア！　もう我慢できねぇ！」
「イヤん♪」

（だから、せめて人目に付かないところでやれと……）

裏路地の方に歩み去る二人を見て、アトリは頭が痛くなった。
というかどちらも屈強な男だったことには、突っ込んだ方がいいのか触れない方がいいのか、アトリには分からない。
できれば、男が男の堅い尻を撫でまわす映像は頭から消したかった。

そのような光景は至る所で見受けられる。

この街には娼婦や男娼が溢れており、枯れ木のような老婆まで体を売っている。
彼ら彼女らは、性別関係なく手当たり次第に声をかけ、とても高い確率で商談は成立するようだった。料金は基本的に前払い。行為中に追加料金が発生したりすることもあるようで、その料金が払えない客が殴りつけられていたりする。
それからがまた異常で、殴りつけられた客が失神すると、どこからともなく集まってきた乞食が下着まで全て剥ぎ取って行き、最後は奴隷商が全裸の男を引きずっていく、ということが一連の流れとして起こる。

何もかもがおかしく、アトリの持つ常識とはかけ離れた光景であった。

ため息を吐きつつ歩いていると、アトリにも声がかかった。

「どうしたの。不景気な顔しちゃってさ」

盛んに客を引こうとする男女老婆とは離れたうす暗い場所で、地面に座り込んでいる女性がアトリの方を見ていた。娼婦を避けていたため、いつの間にか端の方に来ていたらしい。
女性は襟ぐりの大きく開いた服を着ており、化粧もしている。
恐らく彼女も娼婦なのだろう。鎖骨の形が綺麗だった。

「いや……この街の人間は随分と開放的だと思ってな」
「ふーん……」

女性は観察するようにアトリを見る。

「あなた、この街に来たの初めて？」
「……ああ」
この光景に気圧されているのは見渡す限り、恐らくアトリだけのようだし、さぞかし分かりやすいだろう。
女性はへぇ、とつまらなそうに鼻を鳴らすと、乱痴気騒ぎの起こっている方を見た。
懐かしむように喋り出す。
「ここは取り締まる人もいないから、昔からお盛んな人は多かったわ。人って、欲望には弱いじゃない？」
「……そうだな」
アトリの相槌はどうでも良かったのか女性は続けた。
「でも、最近はちょっと変ね。みんながみんな可笑しいくらいに盛ってる。まるで現実から目をそむけているみたい。ねぇ、あなたは冒険者みたいだし、知っているのでしょう？」
女性は少し声をひそめて言った。
「あの嫌な風と、絶対に治らない病気の話」
「……。」
「もう、みんな世界が終わっちゃうって、感じているのだと思うわ」
女性は疲れた表情で、そう言った。

◆◆◆◆◆◆◆◆

この世界には、時折、海を渡る風が吹く。

主に季節の変わり目、おおよそ3月に一度、大陸風が隣の大陸から空気を運んでくるのだ。

昔は黄色い砂が飛んでくる程度だったのだが、ここ最近、東の大陸から奇妙な光の霧を運んでくるようになった。

これが全ての異常の始まり。

光の霧が吹きこんで来ると同時、大陸に異形と化した獣が溢れかえることとなったのだ。

これによって、まず人間の支配する土地が大幅に縮んだ。

市街地に人は溢れ、季節ごとに伝染病が流行り廃りを繰り返す。

『エーテル』と名付けられた、その霧のような美しい微細な粒子について分かっていることは多くない。

だが、体内に蓄積したエーテルが生物を異形に変えることは、多くの事例から明らかだった。

野に住まう獣は異形と化して、人を襲うようになり、それだけではなく、人も異形となりだした。

突如頭が肥大化する。

肌が甲殻質になる。

体の一部が、獣のそれになる。

なかった器官が生えてくる。

皮膚が爛れ、毒の息を吐くようになった者もいた。

それらの変化は精神にまで影響を及ぼし、最後には死ぬ。
それは、正常な者たちからしてみれば恐怖以外の何物でもなかったのだ。
患者を隔離し、エーテルの風が吹く時にはシェルターに籠るようにしても意味はなかった。
風が吹かなくとも、この大陸の空気の中に紛れ込んだエーテルが、徐々に体に蓄積されていくことが分かったのだ。
隣人が、そして自分が、いつ異形になるか分からない。
いつしか、人々はこれを『エーテル病』と呼ぶようになった。

◆◆◆◆◆◆◆◆

病の進行を抑え、体内のエーテル濃度を薄める薬も開発されている。
しかし、それはとても高価である。

「私たちは貧乏だから、もう怪物になって死ぬしかないじゃない。みんな自棄になってるのよ」
「……あんたは随分とまともそうだが？」
「さぁ、どうでしょうね」
女性は言葉を濁して、立ちあがった。
「さて、と。お客もつかなそうだし、帰るわね」

立ったことで、スカートの裾から現れた脚は、人のものではなかった。
何も履いていない脚先は、鹿のような蹄である。

「……。」

彼女も『エーテル病』が発症している一人だったということだ。
恐らくは、今日『も』客がつかなかったのだろう。化粧でうまく隠しているが、頬が少しこけていた。

「それとも、あなたが買ってくれるのかしら？」

なんてね、と彼女は自嘲的に笑うと、アトリを残し、去って行く。
アトリは思わず彼女を呼びとめていた。
怪訝な顔をして振り返る女に、アトリは金貨を一枚渡す。

「なに？　本当に奇妙な体の女としたくなったの？」
「いや、情報量だよ。為になった」
「……」

何とも言えない顔をする女はどのような葛藤があったか知らないが、とりあえず金貨を受け取ることにしたようだった。

「礼は言うけど、お人良しは早死にするよ」
「そうかもな」

どうせ拾った金だ。
誰も彼もにばら撒くわけにはいかないが、親切に忠告してくれるような人になら、一枚くらい上げても良い筈だ。

それに、今の女性の話で、アトリは一つ気になるところがあった。
彼の記憶にもエーテルについての情報はあったが、アトリが知っているエーテルは空気中に拡散したりしない。
木の幹から流れ落ちる半固形の粘液だったのである。
ダルフィという都市に聞き覚えがないことから、今いる大陸はアトリがいた大陸とは違う場所ではないかと当たりを付けていたのだが、そう簡単なものではないと、アトリは思い始めた。
下手をしたら時代が違う。

「そうだ、ヴィンデールという物を知っているか？」
「ヴィンデールの森のこと？　良く知らないわ」
「森……。いや、知らなければいい」
「そう」

女性は興味なくしたように、アトリの前から去っていく。
お金を上げたところで、何も変わらない。死ぬのが伸びるだけかもしれない。
己の偽善的な行動に少々嫌な気分になりながら、アトリは気持ちを切り替えると、ロドニーの家へと向かうことにした。

ロドニーの家は、平の一軒家であった。扉には鍵がかかっていたが、ロドニーのタグで開いた。この辺り、滅んだ機械文明の名残で強固

なセキュリティが使われている。さすがに犯罪都市だということだろう。
５，０００ｇｐは高かったが、セキュリティの高そうな家を手に入れることができたのは、非常に大きい。ドアを押し開けると、質素な部屋が出迎えてくれた。

寝具があり、机があり、トイレがあり、風呂がある。おまけにキッチンもある。家具付きだということも考えると、破格の値段だったかもしれない。
残念ながら武具の類は無いようだった。恐らく倉庫のような建物を他に持っていたのか、ギルドに預けているのか。探してみるがヒントはない。
まぁ無くとも問題は無い。

ウロウロと室内を歩き面白い物が無いことを知ると、アトリは少々堅めのベッドに座り込み、これからのことを考え始めた。

この家を得たことで、アトリはしばらくダルフィに滞在することに決めた。他の都市に行くとしても、情報を揃えてからになる。
なにより、この街は危険だが、鈍りきった自分を鍛えるにふさわしい場所だとも言える。

ヴィンデールの森。恐らく有名な場所なのだろうが、そこに行くべきだとしても、急がなければならないという感覚は無い。
であれば、情報を得るのは強くなってからでいい。強くなる過程で分かればよし、分からずとも、強くなればコネクションを広げることも簡単だ。すぐに探り出して見せる。

強くなることと、金を稼ぐこと、その両方を満たすために、依頼を

こなして行くのが良いだろう。
まずは明日、ギルドに登録しに行かなければならない。冒険者として登録されれば、この街ではないギルドでも依頼を受けることができる。
何か試験があるかもしれないが、それは今考えても仕方がない。

方針が決まり、寝ようと思ったアトリだったが、その時腹の虫が小さく鳴いたことで、腹が減っていることに気付いた。おまけに自分の服の汚れも相当なものだった。その服に包まれているアトリの体も、もちろん汚い。

（まずは風呂か）

その後街に出て、サンドイッチでも摘まむとしよう。

シャワーから出た水が、体に染みついたあれやこれやを洗い落としていく。プチの血液やそれに準ずる何かだ。
水脈から水を引き上げるシャワーは、割と高価なものだったはずだ。ロドニーはそれなりに稼いでいたのだろう。そんな男があんなところで何をしていたのやら。まぁ、あまり興味もないが。
シャワーや蛇口からは意外にも透明な液体が出てきた。なんと色の付いていない水だ。ダルフィの地下水が綺麗なのか、それとも高性能な濾過器を備えているのか。もちろん、煮沸もせずに飲んだらどうなるか分かった物ではないが、体を洗う分にはこれ以上ないものだった。

その後晩飯を買いに出かけアトリは、大通りを歩いている最中に３回子供とぶつかり、さらに４回大人とぶつかり、その全てがスリだった。
アトリはきっちり財布を守ったはずだったが、知らない内に金が３割ほど減っていた。恐らく、ぶつかる様な下手な輩ではなく、手練のスリにやられたのだろう。
この街は本当に侮れないと、アトリは思ったのだった。

第二章3

戦いの強さを決めるのは、動作の反復だと言っても過言ではない。
反射的な行動がとれるまで身に染み込ませた動きは、どんな時も裏切らないからだ。
魔法も、格闘も。

早朝、アトリは暗い家の中で、座禅を組み、呼吸を静めている。瞑想中だ。

アトリの体は筋力が落ち、反応速度が鈍り、まるで戦いを知らない子どものような戦闘力だ。
全ての鍛練は最初からやり直した方がいい。

だが、一から練り直すとは言っても、以前高みへと登ったことがある経験は役に立つ。少なくとも、自分にあった効果的な鍛練法は分かっている。

瞑想は魔法訓練の初歩にして、奥義とも言える。
己の身にあるマナを感じ取るのだ。魔法とは、マナを呼び水に魔力を集め、それに属性を与えて使役すること。
マナが分からなければ訓練することすらできない。幸いにして、アトリにはその才能があった。
呼吸を徐々に落として行く。心臓すらも息をひそめるように。

マナは血液と共にあり、体に循環すると考えられている。マナを感じ取ることは、静かにしていれば比較的容易だ。しかし動きの中で常に感じ取るようにするのが難しい。マナのか細い反応は、激しい血流に容易に紛れてしまうのだ。
魔術師が格闘を苦手とする理由であり、強者になる条件の一つ。

訓練すれば魔力を集める効率を上げることはできる。
しかし空気中から魔力を呼び込むための触媒とも言えるマナを、鍛錬によって増やすことはできない。

以前は眠りながらにしてマナを感じていたようなアトリだったが、今はその間隔がすっぽり抜け落ちている。
魔法の才能のない人間が「当たり前にある物を感じ取るのは難しい」と言うのを聞いて理解ができないと思ったが、まさかそれを実感するとは思わなかった。

だが、自分の中を流れるマナをしっかりと感じ取る訓練は決して無駄にならない。
静かに己の内へと埋没し、マナの流れを把握していく。

左腕の手首に指を当て、流れる血液を感じ取る。血流の中に、僅かな違和感を感じると、それを意識で追っていく。違和感こそがマナだ。
見失うことも多いが、やがて違和感が指先を周り腕を上り、肺を迷走し、心臓へと流れこむ、ここまでを感じることができた。
初日なら、ここらで十分だろう。

気がつけば汗が顎から滴り落ちるほどだった。
魔法の鍛練はこれくらいにして、体術の鍛錬に移ろう。時間は有限である。

◆◇◆◇◆

今日のギルドの職員は昨日の男ではなく、背の高い長髪の男だった。
丁寧な受け答えで、なにより盛っていないので好感が持てる。

冒険者ギルドに登録するのは簡単で、タグに血液を登録すればいいらしかった。
正確には体に流れるマナを登録するのだが、アトリの感覚は衰えきっているので、血液を塗りたくったような感覚しかない。
アトリの血は緑っぽくて、ギルドの職員は少々驚いていた。

無事登録はできたので、早速掲示板で依頼を探してみる。
掲示板には二種類あって、一つが依頼を張り付けるもの。もう一つは、出現しているネフィアの情報だ。
ネフィアとは、この世界のダンジョン、または遺跡群の総称で、開拓も碌に進んでいないこの大陸では良く見つかるらしい。
ネフィア発見者には報告義務と共に最初のアタックの権利が与えられる。
掲示板には、発見されたネフィアの中でも最近のものの情報が張り出されているらしい。

逆に、依頼の掲示板では古い物も張り続けられる。
各依頼は★の多さで、難易度が示してある。これはギルド職員が一度調査してつけた難易度なので、それを目安に受ければいい。
どんな難しい依頼でも受けることができるが、失敗するたびに罰金を徴収され、何度も失敗すれば人肉製造工場へ送られるという噂もあるほどなので、自分の身の丈に合った依頼を受けるのが賢いやり方だろう。

掲示板には、モンスターの駆除や、護衛の依頼が多い。他には、物品の調達の依頼も多い気がする。
見たところ、一番難しそうな依頼で、報酬が金貨とエーテル抗体ポーションである。これは飲むだけで異形と化した体が元に戻る、最高級のエーテル病の薬だ。

そして、一番簡単なのが、街の外で石を拾って来いという依頼。
外にはモンスターが出るので、街の軟弱な住人には厳しいのだろう。
一応場所も指定してあり、東の森の、石を拾ってくればいいらしい。
最初から失敗してギルドの心証を下げるのはを嫌であり、今のアトリが危なげなく達成できそうな依頼はこれだけだということで、この依頼を受けることが決まった。

◆◇◆◇◆

街に出る前に、買い物をした。
服はロドニーの家にあった物を拝借してきたが、防具は無いし、靴も無い。
裸足の人間など珍しくも無いが、足元への攻撃を防げる金属製のブーツなどは、あると非常に頼もしい。
ある程度お金を残すと武器を買う金が無くなったが、すぐに稼いで、槍辺りを手に入れるつもりだ。
石畳の上をごついブーツをガツガツいわせながら歩いて、街の外へ

と進む。
その最中に後ろから声がかかった。

「アトリ」
「なんだ」
「アトリ」
「……」

仕方なく振りかえると、金髪の少女がこちらを見ていた。
金髪で１４０ｃｍ程の彼女は前髪が長くて目がほとんど隠れており、ワンピースから出ている腕は白くて細い。

奴隷商から押し付けられた少女である。

『いやー、お客さん、これはいいところに。この少女なんですがね、ローランでして、すこぶるいい働きをしますよ！　ほそっこい腕をしてますが怪力でして！　顔も悪くないし、それに処女！　字の読み書きは出来やしませんが、それは教え込む喜びがあるってもんでしょう！　で、どうです？　１０ｇｐでいいので！』

１０ｇｐで押しつけられたケフリッタである。クズ石より安かった。

厄介事の臭いしかしないが、一度引き受けたのに放りだすのも気が引ける。
というか一応証文を破り捨てて奴隷からは解放したのだが、側を離れない。
そんなわけで連れ歩いているのだが…

振りむいたアトリにケフリッタは言った。

「私はお腹がペコペコ」
「……そうか」
「とてもペコペコ」
「大変だな」

ケフリッタは頷き、言った。

「私はお腹が減ると、言動が鬱陶しくなることで有名」

なるほど、確かに鬱陶しい。
それとも自己分析が出来ていることを褒めるべきだろうか。

アトリはため息を吐いて、ご飯を買うことにした。子どもを持った親の気持ちが少しわかるような気がした。

◆◇◆◇◆

ケフリッタが叩き売られた理由は、その力の強さにあるらしい。
料理屋で、陶器製のコップを握りつぶして手を血まみれにしているケフリッタを見ながらアトリはそう思った。

「アトリ…」

困った顔をしてこちらを見るな。

ローランはもともと女性しか生まれない種族で、力が強く、ある程度の年齢から老化しなくなる。
少女にしか見えないケフリッタも実は５４歳。とんでも無く年上だった。
そして彼女はローランの中でも特異なほどに力が強いらしい。

なんでも、彼女は首輪が鬱陶しいという理由で、今までに４個の奴隷用の首輪を破壊し、他の奴隷が品定めされている場面で「目が嫌らしい」という理由で８回ほど奴隷を買いに来た客を殴り倒したとか。
ダルフィにあるまじき純な心を持っていると、一応褒めることもできる。

奴隷商としては、タダ飯が食べられるという理由で居座り続ける怪

力少女を抑え込むための人材を雇うより、さっさと売り飛ばした方が利益になると判断したのだろう。

ケフリッタがアトリのことを気に入ったようなので、必死こいて売りつけたらしかった。

血まみれの手を机にこすりつけている彼女に（もう血は止まったらしかった）、アトリは尋ねる。

「それで、なんで俺に着いてきたんだ？」

その質問をするために飯を食わせているのだ。

「それは……」
「それは？」
「……」

アトリはしばらく少女が喋るのを待ってみた。
ケフリッタはパンをモソモソ食べていたが、やがて顔を上げて言った。

「アトリの雰囲気がすごい」
「すごい？」
「すごい」
「どうすごいんだ」
「つい気持ちいいことを許してしまいそうなほどすごい」
「……」

どう答えろと。
少女はアトリの視線が突き刺さるのを感じたのか、小さな口で一生懸命食べていたパンを置いて自分の体を抱きしめ、無表情のまま言った。

「恥ずかしい」
「……。」

見ていると、少女はまたパンを食み始めた。

「このパン美味しい」
「そうか。いや、わかった。話が進まないということが分かった」

会話を諦めたアトリは脱力し、飯を口に運び始める。

考えて見れば、強力な助っ人が手に入ったということだろう。今一胡散臭さが抜けないが、複雑なことを考えられるような人間には見えないし、なにより今のアトリよりは強い気がする。
受けられる依頼も増えるだろうし、悪いことばかりじゃない。

「私の胃はまるで満たされていない。次の料理を頼んでしまう罪深い私を許してほしい」

食費に金がかかりそうだが、まぁ、許容範囲だ。多分。

「そういえば、ヴィンデールの森って知ってるか？」

会計をする際、しっかりとコップの代金も取られながら、あまり期待せずに聞くと少女は堂々と言った。

「私に教養を期待しない方がいい」

だろうと思ったよ。

第二章３（後書き）

今回の投稿はここまでです。
読んでいただいてありがとうございます。

【「少女」を知らない人のために】

Ｅｌｏｎａではチュートリアルで人肉を食わされパチモンの金塊を掴まされた後、最初の街を訪れます。

その時、以下のようなイベントがあります。

≪ペットとの再会≫

あなたは懐かしい鳴き声に気付いて、ふと歩みを止めた。
なんと、船が難破した時に居なくなったあなたのペットが嬉しそうに走ってくる！
あなたのペットは……

ａ：犬だ！
ｂ：猫だ！
ｃ：クマだ！
ｄ：少女だ！

断然「ｄ」！　しかしＥｎｔｅｒを連打していると犬になるという罠。

少女がペットの四択の中にさらっと混じっているわけですね。少女が嬉しそうに走ってくるなんて！　しかもペット！　というか鳴き声？

ここら辺から、プレイヤーはｅｌｏｎａのカオス具合を理解していくことになるのです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8878z/

Elonaを生きる！

2011年12月27日23時52分発行